

「明日、結婚式なんですけど!?!」

「婚約者に浮気されたので過去に戻って人生やりなおします」

1



登場人物紹介

アルフレッド

バルフォア侯爵令息。
一度目の時はミアアの婚約者だったが、
二度目ではルーシーに急接近してくる。
その言動には、彼なりの思惑がある……？

ミミリン

ルーシー

レイスター公爵令嬢。
ジャックの婚約者として妃教育に励んでいたが、
終始蔑ろにされていた。
彼らから一緒に過去に戻ろうと言われ、
その提案を受けることに。



リロイ

ルーシーが街中で出会った少年。
隣国のミラフリス語を話す、
その正体は……？

アリシア

シャラド侯爵令嬢。
一度目では度々ルーシーに
嫌味を言ってきたが、
二度目では違った交流を持つことに。

ミア

ブルームス男爵令嬢。
ジャックの浮気相手で、
人目をはばからずにいちゃつくことも。

ジャック

グライト王国の第一王子。
浮気相手のミアと一緒に、
ルーシーに過去に戻ることを提案してくる。

CONTENTS

プロローグ	006
第一章 二度目の人生のスタートです	009
第二章 一度目とは違う日々	075
閑話 恋する男の大奮闘	120
第三章 死の回避	135
閑話 アルフレッド、焦る	178
第四章 嵐のような隣国王子	181
閑話 絶望のアルフレッド	210
第五章 そして、誤解が解ける	221
エピローグ	267
番外編 アルフレッドの初恋	271
番外編 ミミリン・レイスターの家族愛	280

明日、 結婚式 なんですけど!?

~婚約者に浮気されたので
過去に戻って人生やりなおします~

I

プロローグ

「私は彼女を心から愛しているんだ。だから君とは結婚できない」

婚約者の王子様、ジャック殿下は突然王宮に与えられた私の部屋へ訪ねてきたかと思うと、申し訳なさそうに頭を下げた。そう言つてのけた。

レイスター公爵家の長女、ルーシー・レイスター。十八歳。

私は今、人生で最大の屈辱を味わわされている。

そもそもこんな夜更けにわざわざこっそりと訪問してきた時点で嫌な予感しかしなかった。いや、いい話であるわけがなかった。——なんたつて婚約者たる私の部屋に、可愛らしいご令嬢をベツタリとくつつけてきたわけだからね！

「紹介するよ、彼女が私の恋人であり愛する人、ミリア・ブルーミス男爵令嬢だ」

当然のように部屋に入り込み、私の対面のソファに二人寄り添うように並んで座って、自分がどれだけ彼女を愛しているか、彼女がいないと生きていけない、などなど、甘ったるいことを殿下は神妙な顔でつらつらと並べ立てる。いや、もうどうでもいいんだけど。

とりあえず、問題だらけのこの状況、何が一番問題かって？

明日が私達の結婚式だつてことだよ！

「君には本当に申し訳ないと思つている」

いやほんと、何考えてるの？ 明日だよ？ あと数時間したら結婚式！

それを前日の、それも夜更けにいきなり「君とは結婚できない」？ いやいやいや。今更いまさらどうしろつていうわけ？ せめてもう少しどうにかできる段階で言つてくれないかなあ？！

「私も悩んだんだ。だが、どうしても彼女以外を伴侶はんりよに迎えるなど考えられない」

隣にベツタリくつついて座つているミリア男爵令嬢も、申し訳なさそうにしておれて見せているけど、口元ちょっと緩ゆるんでるぞ！ 嬉うれしいのを隠ひそきれてない！ わかるよ！ 大好きな麗うつくしい王子様が、自分のために婚約者に「結婚できない」つて言い渡してくれたんだもんね！ どれだけ自分のことを愛しているか目の前で何度も言つてもらえて舞い上がるよね！ でもね、数時間後には私この人の妻になつてははずだったんだつてば！

そう、数時間後には妻になる予定なのだ。ほんと、今更そんなこと言つてきて、このオウジサマはいつたいたいわけ？

「君にとつても、愛のない結婚をするのは不幸でしかないと思うんだ」

この段階で結婚取りやめだとか、私にとつては恥はじでしかないんだけど？

うちの家名にも傷がつく。政略結婚ではあるけれど、今そんなことを言いだすくらいならばせめてもっと早ければどうにでもできたはず、たぶん。その場合でも恥をかき、傷が残るのは私なの解^げせないけれど。でもさすがに今からどうにかできるわけがないでしょう。馬鹿じゃないの？ ていうか今の時点で私のプライドと尊厳はズタボロだよ……。殿下に愛はなかったし、私達はほとんど婚約者らしい交流もなかったけれど、これはさすがに酷^{ひど}い。

その上、私に泥をかぶって屈辱にまみれて社会的に死ねと？

「ただ、私としても、君の名誉に傷をつけることや君に恥をかかせることはしたくない」
は？ いや、もう今の時点で屈辱でしかないわけだけど。

ここまでなんとか貼り付けていた仮面の笑みがいよいよ崩れそうだ。
そう思っていると、ジャック殿下は思いもよらないことを口にした。

「だから、一緒に過去に戻ってこの婚約を取りやめにしないか？」

「——は？」

ついに笑顔の仮面が剥^はがれた私は全然悪くないと思う。

第二章 二度目の人生のスタートです

「だから、一緒に過去に戻ってこの婚約を取りやめにしないか？」

「——は？」

いやいや、この人何言ってるの？

理解できない私が悪いのか？ そう不安になるほどジャック殿下は大真面目な顔で私を見つめている。

「ジャック様あ……」

私の呆けた顔を見て、不安そうに殿下の袖口をそっと引っ張るミア男爵令嬢。

小柄で童顔、不安そうな目はうるうるしていて上目遣いがよく似合う。なるほど、可愛いな！

殿下はこういう可愛い系が好きだったわけね！ 近寄りがたいとよく言われる私に、文字通り決して近づいてこないわけだわ！

ジャック殿下は可愛い恋人の手にそっと自分の手を重ねて甘く微笑むと、こちらに向かって真顔に戻る。変わり身が早い。

「すまない、説明が先だったな。君は我がグライイト王国に伝わる『時戻り』の言い伝えを知っているだろうか？」

おっと、ミリア男爵令嬢の可愛さに感心している場合じゃなかった。

——『時戻り』の伝説。それはもちろん私も知っている。仮にも次期王妃となるべく、長い間妃教育を受けていた身だから。

あ、「それなのに！」と思つてまた腹が立つてきちゃつた。

「時戻りはただの言い伝えではなく、実在する秘術なんだ」

……ほう？

「王家に代々伝わる『時戻りの杯』を使い、百年に一度咲くという『星花』から抽出したエキスをレシピ通り調査して飲む。そうすることで実際に時を戻ることができると言われていた。ただ、星花は時戻りをしようがしまいがきつかり百年に一度しか咲かず、おまけにどこに咲くかが百年経つうちにどうしても曖昧になる。だから実際に時戻りすることはほぼ不可能に近いんだ」

時戻りの杯の話も教えられた知識の中にある。だけど星花については初耳だ。おそらく、万が一にでも私欲で時戻りを実行しないよう、王家にしか詳しい内容は伝えられないのだろう。

今まさに、目の前の王子様は愛する人と結婚したいという私欲のために使いたいと言っているわけだけどもね！

「その不可能に縋つてでも、時を戻つてこの婚約をなかつたことにしたいと……？」
棘がある言い方になってしまふのは許してほしい。

殿下にしてみればこの婚約をなかつたことにしたいという以上に、『愛する彼女と結婚したい』

ということなのだろうけど。

「いや、実は数日前、たまたま星花を見つけたんだ」

「たまたま、ですか」

星花を見つけた……？ 百年に一度、どこに咲くかもわからないと言われる花を、たまたま……？

「最初は私も、この結婚は今更どうにもできないと、諦めるほかないと思っていた。けれど……君も知っているだろう？ 長く王都に蔓延まゑえんしている怪しい薬あやの存在を。その薬のせいで何人も死者が出ているんだ。私は騎士団や研究者たちと一緒にその薬について調べていてね。薬の原料ではないかと疑われている植物を探しに目ぼしい場所を搜索中、偶然見つけたんだ」

今、地味に私との結婚を「諦めるほかない」って言ったわね。私そういうの忘れないわよ。

ていうかこの可愛いミリア男爵令嬢も、そういえば婚約者がいたわよね？ あれは確か……まあそんなことはどうだっていいか。

それよりも、偶然星花を見つけた？ そんなことってあるの？

「——これはもう、運命じゃないかと思つて。ただ、私とミリアだけが記憶を持ったまま時を戻るのは、あまりに君に対しての誠意がないと思つて、こうして君も誘いに来たんだ」

もっと詳しく話を聞くと、星花から調査した秘薬を、時戻りの杯を使って飲むことで時を戻るわけだけど、どうもその秘薬を口にした者は全員戻る前の記憶を保持したままでいられるらしい。も

ちろん殿下はミリア男爵令嬢と一緒に秘薬を飲んで、恋人同士であることを覚えたまま時を戻るつもりらしいが、そこに私も加えてくれるというわけだ。

確かに、別に黙って戻ってしまえば私への不誠実や裏切りをなかったことにできるのに、こうしてわざわざ私にも話をしてくれたのは一応彼なりの誠意のつもりなのかもしれない。

「禁書庫にあった時戻りについて書かれた本のレシピのとおり、もう秘薬は作ってあるんだ。……完成が今日の夕刻で、こうしてギリギリにはなってしまったけれど……とにかく、明日の結婚式までに私達は時を戻る。君はどうする？ 記憶を持ったまままでいたいのか、どうか」

ここまで黙って話を聞いて、正直なところ、ふざけるな！ というのが私の気持ちである。何に対してか？ もちろん全部に対してだ。

仮にも私という婚約者がいながら平気で恋人を作り、私との結婚を「仕方なく」「諦めるほかなく」我慢して受け入れようとしていたことを本人に言っちゃうのもどうかと思うし（もうちょっと言い方考えられなかった？）、たまたま運よく見つかっただけの星花であるとはいえ、王家に伝わる秘術をそんな私欲のために迷いなく使うのもどうかと思う。なんていうか……二人にとっては一切羽詰まった最後の手段で、絶望の中に飛び込んできた希望の光なんだろうけれど、そもそも私の心を踏みにじりすぎているとは思わない？

私は今、屈辱と怒りでいっぱいなのだ。

でも、私が何をどう言ったって、きっとこの二人は悠々と時を戻る。

葛藤^{かつとう}はある。腹立たしさは大きい。だけど、いったん二人のことを忘れて冷静に考えてみる。

よく考えると——そんなに悪い話でもないのかも。

記憶を持ったまま時を戻る。これは大きなアドバンテージだ。

別に何も悪だくみに使おうとか、これでお金を稼^{かせ}ごうとかそんなことは思わないけれど。頭によぎるのは一つだけ。

——お父様の命を、助けられるかもしれない。

四年前、私が十四歳になる誕生日の直前に病^{やまい}で亡^なくなってしまったお父様。

——ハイサ病。あれはその年に初めて流行^{はや}した、なんてことない病気だった。

それ以降は毎年同じ季節に流行^{はや}るようになった病気で、流行り始めてすぐにハイサ病の薬も開発された。きちんと薬を飲めばすぐに治るし、最悪薬を飲むのが遅くなっても少し寝込むことになるくらいで終わるはずだった。それなのに、そんな病でお父様はあつという間に亡くなったのだ。

もしかしてどうにかその死を防げるかもしれないと思うと、むしろ時を戻るメリットは私の方が大きいのではないか？

たぶん、殿下はそれもわかったうえで私にこんな提案をしたのだ。

君も嬉しいでしょ？ これでチャラにしてね！ っところ？ やっぱりちょっとモヤモヤするわ……。

それでも……これは間違いなく私にとって降ってわいた幸運だ。

うん、そうだよ。このまま愛のない、心を踏みにじられた結婚をするしかなかったかとも思うとぞっとするし！ 怒りはなくならないけど、これってすごくラッキーなのかも！

お父様を助ける！

そして……できることなら私だって、私を愛してくれる人と結婚したい！

だんだん気持ちが悪ってきた。私は存外単純だ。怒りも忘れてむくむくと期待と喜びが湧き上がってくるのを感じる。

私は思わず身を乗り出し殿下の両手をガシリと握った。

あ、ごめんなさい、他意はないのよ。ミリア男爵令嬢、そんなに嫌な顔しないでっば！

「殿下、あなたのお気持ちはわかりました。一緒に時を戻りましょう……三人で」

こうして、急転直下の結婚式前夜、私の人生二回目のスタートが決定したのだった。

余談であるが、いざ時戻りの秘薬を飲む際の話。

ミリア男爵令嬢は殿下の後に私が時戻りの杯に口をつけるのをものすごく嫌がった。
私の後に殿下が飲むのもまたしかり。

……めんどくさい！

そりゃ嫌だろうけどこの一回くらい我慢できない??

まあ可愛いから許すけどさ。

私も愛する人ができれば彼女の気持ちがかかるのだろうか……? ?

結局、殿下↓ミリア男爵令嬢↓私の順で秘薬を飲んだ。

杯のここに口をつける、ここはダメだと厳しい視線で指導を受けた。

だから、めんどくさいってば！



それは私が十歳のときのこと。

「ジャック・リオ・グライト第一王子だ。よろしく」



キラキラと日の光を反射する銀髪に、夜明けの空を閉じ込めたような濃紺のつんの瞳ひま。

まるで天使みたい！　と思つた気持ちのまま、この人に恋をする未来もあつたかもしれない。

……婚約者になつたばかりのジャック殿下が、これ以降、私と目も合わさずのため息しかつかないなんてことがなければね！

ジャック殿下はどうしても私が気に入らないらしく、その態度は徹底していた。

妃教育の合間にと、週に一度と最初に決められていたはずの婚約者同士の親睦しんぼくを深めるお茶会は、気がつけば二週間に一度、一か月に一度とあつという間に頻度ひんどが減つていき、会つても響ひびめ面つらでお茶を一杯飲んで帰つていく。

信じられる？　私が挨拶あいさつをしても、ちらりとこちらを一瞥いちべつするだけで返事はなし。どうにか歩み寄ろうと「お勉強はどうですか？」と話題を振つてみても「お前に関係ないだろう」と突き放され、「よかつたらこの後庭園を案内してくださいませんか？」とお願ひすれば「勝手に一人で見て帰れ」と置き去りにされる。それで諦めて最低限の挨拶のみで後は無心で時間が過ぎるのを待つようにすれば「愛想あいそのない女だな」と罵ののられ。いったい私はどうすればよかつたつていうのよ！

ううん、わかつてる。どうしたつて受け入れる気はなかつたのよね。結局私達うまが上手うまいく可能性なんて方に一つもなかつたんだわ。

ちなみに王妃様は、私達のお茶会はずつと週に一度のままだと思つていた。本来殿下とお茶をしているはずの三回に一回は、私は王宮の厨房ちゆうぼうに入り浸りおやつをもらつて食べていた。

当然手紙のやり取りや、誕生日の贈り物なんかも一切なし。どんなに冷え切った婚約者同士でも最低限のマナーは守るものだと思うけど、この国の王子ともあるうものがそんな態度なのかとちよつと戦慄した。

それから少し成長しても、隣に立つのは婚約者同伴必須のパーティーのエスコートのときのみ。

それも、義務だから仕方ないとばかりに無言でファーストダンスまで踊り終えたらハイ解散である。

せめて体裁だけでも取り繕ってほしいと「笑顔を浮かべることくらいしてくださいませんか」

と言えど当てつけのように不機嫌な顔をされ、いつだって私は他の令嬢達にクスクス笑われていた。

そんな態度を王妃様に注意されるようになって、公の場では貼り付けた笑みを浮かべるようには

なつたけど、時すでに遅し。その頃には私は同年代の令嬢や令息から侮られ、馬鹿にしてもいい

対象としてすっかり認識されてしまっていた。

おまけにあの男！ 王妃様からの注意を私が泣きついたせいだと思ひ込んで、「親に告げ口するしかできない卑怯な女」と罵つたのよ！ はあ!? あんなあからさまな態度でいて苦言の一つも

呈されずに済むと思つていたのならとんだお花畑よね！ 何度言い返したかったか。どうせ何を言つても聞くことはないとわかつていたから面倒だと無視したけれど。

王宮でも、十六歳から三年間通つた王立学園でも、すれ違う時に目も合わせず当然会話もない。

あれ？ この人私の名前覚えてるのかな……？ と思うくらいには名前を呼ばれたこともなかった。

もちろんミリア男爵令嬢の存在は知っていた。当然でしょう？ あれだけ噂になつていればね。

なるべく関わりたくなくて避けてはいたけれど、それでもところかまわずミリア男爵令嬢とべたと触れ合う殿下の姿は何度か目にしたし、周りの意地悪なご令嬢方はわざわざ直接忠告してくださっていたしね。おかげで周囲に「肩書かたがきだけの婚約者様」ってますます馬鹿にされていた。

一応婚約者の義務として、最初の頃に数回「ご自分の立場をもう少し考えて行動してほしい」と注意してはみたものの、案の定「自分が愛されないことへの嫉妬しよとか？」と笑われて終わりだったわ？ 何をどうすればそんな結論になるのかさっぱりわからなくなつて、酷い態度に慣れた私でもさすがにびびくりしたわよ。

私のことを気にかけてくれる人ももちろんいたけれど、あからさまな殿下の態度に私に関わると不興を買うのでは、という空気ができあがつていた。

それでも声を掛けてくれる人は、私が自分で遠ざけた。そんな優しい人を巻き込みたくはなかったから。おかげで友達はいなかった。これに関しては正直結構恨うらんでいる。

それでもこれは政略結婚。私に求められているのは愛し愛される王太子妃ではなく、将来の王を支え公務に邁進まいしんするお仕事人間なのだと自分に言い聞かせ、割り切り、勉強だけは必死に頑張った。それなのに……結果はご存じのとおりである。

私を毛嫌いし、遠ざけ、それでも婚約者としたまま愛する機会も愛される機会も奪ってにおいて、自分は「愛を貫つらぬきたい」ときた。

やっぱり、こうして思い返すだけでもはらわたが煮えくり返りそう……！！

——私は決めた！　せっかく時を戻り人生をやり直すのだから、きっと愛し愛される結婚をする
と！　そのためにも、私の記憶に暗い影を落とすジャック殿下とは、絶対に最低限しか付き合わ
ない！

絶対に——！

はっと意識が覚醒する。

バチバチと視界が眩しく光り、何度か瞬きを繰り返してようやく白い世界に色が戻る。

呆然とした思いで何気なく自分の両手の平を見つめた。

手が……ほんの少し小さい気がする。

本当に、本当に時戻りはあったんだ！　時が戻った！　人生二回目の幕開けだ！（途中からだ
けど）

体の感覚も戻ってきて、思わず立ち上がり小躍りしそうになった瞬間、はたと気づく。

……ちよっと待って？

広いガーデンテラス。美しく整えられた庭園。

目の前に広がる真っ白なクロスのかけられたテーブル。その上の高級そうなティーセットと、香

り立つ紅茶。大好きだった、甘いチョコレートソースでウサギやクマの顔が描かれた可愛らしいカップケーキ……。

ちよつと待て。

嫌な予感が出て、恐る恐る自分の対面に視線を向ける。

おいー！ ちよつと待て！！

目の前の、呆然とした表情の天使のような男の子と目が合った。

「嘘うそでしょう!？」

天使……もとい最後に見たときよりも少しあどけない顔をしたジャック殿下は私の言葉に反応して目を見開き、次いでその顔をくしゃりと嫌そうゆがに歪めた。

おい！ 殿下！ 馬鹿殿下！

「もう婚約しちゃつてるときに戻ってどうするのよ——!!」

それは間違いなく、殿下と私の婚約者としての親睦を深めるためのお茶会だった。

「状況を整理しましょう」

私の突然の大声に驚き集まった侍女や護衛達をなんとか誤魔化ごまかしなだめすかし、何かあればすぐに駆け付けられる程度の距離まで離れてもらって実質ジャック殿下と二人きりになる。

ちなみに、渋る護衛に「ちょっとだけ、内緒のお話がしたいの、お願い」と顔の前で手を組んで上目遣いをしてみたらあつというまに聞いてもらえた。まだあどけなさの残る今ならば「可愛げがない」と評判だった私でも可愛くおねだりできるのだ！ちなみにあざとい仕草はミリア男爵令嬢の真似まねである。私は学べる子。

「周りの様子を見る限り、今は婚約して三年後、十三歳の春過ぎだと思つてよさそうですね？」
「どうしてそう思う？」

私は庭園の一角を指し示す。

「あそこだけ、バラの種類が違います。あのバラは国王陛下の視察先の隣国で新しく品種改良された新種のもので、バラのお好きな王妃様のために国王陛下が植え替えを命じられたものだ」と記憶しています。確か十三歳の春過ぎ頃がちょうどその時期ですので、間違いはないかと」

それにこのバラ、他のバラにはない甘い匂いが特徴的で私も好きだったのよね。うん、やっぱりいい匂い。

「君は、五年も経っているのに細かく覚えているのだな……」

「記憶力には定評がありますので」

おかげで妃教育の教師陣にも、飲み込みが早いと絶賛され大変気に入られていた。

ジャック殿下は仏頂ぶつちやうづら面で「そうか」と相槌あいづちを打つ。

「あの、今更こんなこと言つても仕方ないとはわかってはいますが、婚約する前まで戻れなかったん

ですか?」

「……戻る時間は、戻りたいと願うその望みが叶え^{かな}られるぎりぎりの時間までだと書いてあった」

「戻りたいと願うその望み……?」

「君は何を思っ^てて戻りを決めた?」

時戻りを決めた理由? まあ、愛のある結婚もその一つではあるけれど……一番の理由はもちろ
ん。

「父の命を助けることですかね」

「君の父上のレイスター公爵は来年、私達が十四歳になる年に亡くなったと記憶している。十三歳
に戻れば一年ある。それだけあれば十分準備してその死を防げるだろうな。……つまりそういうこ
とだ」

どういうこと!?

いや、言っている意味はわかる。わかるけど。

「殿下は!? 殿下は私との婚約を取りやめたいと願ったのではないのですか?」

そうであれば戻る時間は私達の婚約が結ばれる前になるんじゃないの!?

しかし目の前の外見天使は悔^くしそうに顔を歪めて言い放った。

「私は……そのつもりだったが、戻る直前あまりの喜びに思ってしまったかもしれない」

「何を」

「これでミアと結婚できるのだな……と」

え？ どういうこと？ それでなんで十三歳で妥協たきょうされるの？

「つまり、私の願いは君との婚約が解消されさえすれば叶う。正式に婚約発表のパーティーを開いたのは学園入学前、十五歳のデビュタントのことだ。……それまでは大丈夫という判断なのだろう」

はあ？ ていうかそれって誰の判断？ ……たぶん、あなたですよね!?

思わず殿下をじとりと睨む。

つまり何？ 要するにそれって、やっぱり意識のどこかで婚約解消してミア男爵令嬢——もうミアさんでいいわね。ミアさんと結婚できれば、私が恥をかくだとか、レイスター公爵家の名に傷をつけるとか、そんなのどうでもいいと思っただけのことじゃないの？

なんて嫌な奴なのか！ やっぱり一緒に時戻りしてよかった。

そうでなければどんな理不尽りふじんな行動をされたことか……。

「殿下……私、あなたにみじんも興味はなかったけれど、今日から嫌いになりました」

心の叫びのまま、できる限り睨にらみつけてそう告げる。

不敬？ 知ったことか！ この湧き上がる怒りをどーしても！ 伝えたい衝動しょうどうに抗あえなかった。

殿下は目を丸くして私を見つめた。

そして次の瞬間、「ぶふっ」と音まで立てて思い切り噴き出した。

……いやなんで？

殿下はクスクス笑いながら、上目遣いでこちらを見る。

……その顔やめろ、可愛いな、外見天使。(中身はくそやろう)

「君もそういう顔でそういうことを言うんだね……我儘わがままで傲慢ごうまんでいけ好かないだけの、その辺によくいるつまらないご令嬢と同じだと思っていた」

「はあ」

とんでもないことを平気な顔で言い放つ殿下。

私以外にはちゃんと優しい王子様だと思っていたけど、周りのご令嬢ひとづくを一括りにそんな風に思っていたのか。

ていうか本当にもものすごい言われようだ。私に対しては初対面からずつと嫌っていたみたいだったけど、どの時点でそこまで嫌うほど我儘で傲慢でいけ好かないと判断したの……？

とりあえず、文句を言う気も起きないほど私や他の令嬢へんけんへの偏見へんけんがすごい。

「私のことが大好きな君がまさかそんなことを言うなんてね。ミアアのことを聞いてようやく吹っ切る気になったのかい？」

「は？」

「ん？」

今この人、なんて言った……？

殿下も私のぽかんとした様子に違和感を抱いたようで、不思議そうに首を傾かしげている。
いやいやいや。

「あの……誰が誰を大好きですって……？」

「君が、私をだろう？」

「……私、殿下のことを好きだったことなんてありませんけど」

「えっ」

殿下は私の言葉に口をあんぐりと開けた。心底びっくりしたみたいな顔してるけど、こっちがびっくりだよ……！

「……強がっているのか？ ……と、思ったけど、どうもそうでもないみたいだね……」

「はい」

とりあえず即答すると殿下は両手で顔を覆おおった。

「そもそもどうしてそのような勘違いを？」

「勘違い……それは、だって、君が」

「私、一度でも殿下のこと好きだとか言ったことありませんっけ？」

「それは……ないな」

「そうですね？ 好きだとか以前に、私達ろくに会話したことすらほとんどないんですもの」

「なんてことだ……」

そう咳いたきり頭を抱えてしまった様子を見るに、どうやら本気で私が殿下を大好きだと思いついていたようだ。

いやいや。今までの私達の関係でどうしてそう思えたのよ。頭の中お花畑か。

項垂れたままの殿下を無視して目の前のカップケーキを食べる。

お、クマさんがチョコ味でウサギさんがイチゴ味ね！ うーん、やっぱり美味い！ あるはずのお茶会がない日は嬉々として厨房に入り浸るくらいには、私はこの王宮お抱えのパティシエが作るお菓子が大好きだったのだ。

しばらくそうしてお菓子を堪能していると、殿下がおもむるに口を開いた。

「母上が……母上が言ったんだ」

「はい？」

「この婚約は私に一目ぼれした君がどうしてもレイスター公爵にねだって結ばれたものだ」と

「は……？」

思わずお菓子をすくったフォークを口に運ぶ手が止まる。

「当時十歳とはいえ、その頃からご令嬢達の媚を売るような態度や、他の令嬢を蹴落とそうとするような醜い姿ばかり見ていてうんざりしていたんだ。そこにきて君との婚約が君の気持ちで成ったと聞いて……権力を使って自分の我儘を通すとはなんて奴だと、会う前から君のことが大嫌いに

なった」

なるほど、それでさっきの「我儘で傲慢でいけ好かない」に繋がるわけか。なんとなく読めてきたぞ。

きつと王妃様は良かれと思つてそんなこと言つたんだろうな。妃教育でよく会つていた王妃様を思い浮かべる。王妃様と国王陛下は政略結婚ではあつたものの互いに会つた瞬間恋に落ち、恋愛結婚の夫婦も真つ青のラブラブっぷりだ。もちろん陛下は側室も愛妾も持たず王妃様一筋。そんな王妃様、公務はばっちりこなすものの、元々おつとりと優しく可愛らしい人だから、きつと「自分たちみたいになれるように」とかなんとか考へたのではないだろうか。

……完全に逆効果ですよ、王妃様！ 息子の気持ちを見誤りすぎている……！

「それで、私に対してずっと嫌悪感もあらわな態度だつたんですね」

「すまない」

「とりあえず、誤解が解けたようで何よりです。ありもしない恋心を疎まれるなんてさすがに遠慮したいので」

「すまない」

「でも、もしも私が本当に殿下をお慕ひしていたとして、ここまでの態度でさすがに恋慕の気持ちも消えてなくなつていと思ひますけど」

「すまない」

「それから、あと一つ言わせていただけけるなら。もし殿下の勘違いが勘違いではなく事実だったとしても、それでも一応婚約者。殿下の態度は決して許されるものではありませんでしたよ」

「すまない……」

さすがに自分の勘違いに気づいていたたまれないようで、殿下はどんどん俯くばかり。「すまない」しか言わなくなっちゃったし。

まあいいか。本当に殿下に恋をしていたなら今までの仕打ちは耐えられなかっただろうけど、私は幸いそうではない。こうして殿下をたてる必要がなくなつた今、言いたいこと言えて少しスッキリしたし。

「まあそうやってご令嬢方に対して穿つた見方しかできなかった殿下に、ミアアさんという最愛が見つかって良かったではありませんか。あのまま結婚する羽目になつていたらきつとこうして誤解が解けることもなく、仲の悪い夫婦になつたのは目に見えていますし。私も誤解が解けて良かったです。……ある意味ミアアさんのおかげですね」

なんたつてミアアさん、可愛いし。やっぱり可愛いって正義よね。恋愛対象というわけではないけれど、可愛い子って癒されるのよね。思い出して思わず顔が緩む。こんな出会いでなければミアアさんとも仲良くなりたかつたな。

よし、殿下と婚約解消したら今度こそ可愛い女の子のお友達をたくさん作るぞ！

それによく考えれば一度目は妃教育に時間を縛られていて、やりたいと思うことを実際にやれた

ことなんてほとんどなかった。こうなったら友達をたくさん作って、やりたいことはどんどんやるのよ！

幸い「やらなければいけないこと」（例えばお勉強とかね！）は一度目の経験があればそこまで時間をかけずともなんとかなるはず。私は……今度は周りの目を気にせず自分の思うように生きる。

そんな風に決意していると、なぜか殿下は目を丸くして呆然としていた。

「殿下？ 大丈夫ですか？」

「——ああ、いや、すまない。つくづく君のことを誤解していたと思つて。……実は、時戻り前、ミアアは令嬢方に随分と嫌がらせを受けていたようなんだ」

「まさか、それを私が行っていたと思つてたんですか……？」

「だが、ミアアがそう……いや、君はそんなことしそくないよな。本当にすまない」

さすがに心外である。……まあもういいか。全部誤解つてわかつてもらえたわけだし。怒つていいのつて疲れるのよね。

それにしても、ミアアさんつてそんな酷い目にあつていたの？ 聞いたことなかったから知らなかった。私に友達がいらないから誰にも教えられなかったのかしら？ さすがに耳に入りそうだけど。

まあ男爵令嬢が婚約者のいる王子様の恋人だなんて、確かにご令嬢方は面白くないだろうし、格好の餌食えじきよね。もちろん悪いことだけど、彼女が責められるようなことをしているのにも原因があ

ると思う。

「……とにかく、私が言うことではないが誤解は解けた。これからは友人として、私が無事ミリアと結婚できるように協力してくれないだろうか？」

この王子様、私に気持ちがないとわかった途端とたん図々しいな！

まあ協力するのはいいけど！ 言っとくけど、それとこれとは別で私への仕打ちを全部なかったことにできるわけじゃないんだからな！

「……その代わり、私の父を助けるためにもいざというときは手を貸してくださいね。」

「もちろんだ」

とにもかくにも、殿下なんかと絶対関わらないと決めた私の誓いはもの数十分で終わることとなり、私と殿下は通算九年の付き合いにして友達になったのだった。

あつてないような九年だったけどね！



ジャック殿下とミリアさんが無事婚約を結べるように協力をする——。

私に求められることは、「とりあえず婚約者でいること」だ。

ミリアさんは男爵令嬢。過去に男爵令嬢から王妃に上り詰めたご令嬢もいないわけではないし、

現国王夫妻、とりわけ王妃様は恐らく殿下の想いを無下にはしないだろう。私と殿下は政略結婚とはいえ、裏を返せば「他国の姫君を娶る必要があるほど政略を必要としない」状況である。別の形で我が家が王家の後ろ盾であることを明言すれば問題は無いはず。

ただし、お披露目がまだとはいえ一応正式な婚約を結んでしまっている以上、「ハイ、じゃあ解消で！」とはいかない。残念ながら段階を追って準備を整える必要があると思う。

それに、ミアアさんを迎える準備ができる前に婚約を解消すれば、すぐに「自分の娘を婚約者に」と望む家が数多出てくるだろう。

それを防ぐためにも、とりあえずは私が婚約者のままでいて、「防波堤」の役割をしてほしいわけだ。

テーブルに置かれた一枚の紙を手取る。招待客リストだ。

私の「防波堤」最初の仕事である。

数日後、この王宮の庭園で私達と同年代の貴族の息子令嬢達を招いてお茶会が開かれる。記憶にもある。正式な婚約披露パーティーは十五歳で行うとはいえ、基本的には私が殿下の婚約者であることは決まっっていて、そのお茶会にもパートナーとして参加していた。二度目の今回もそうなるわけだ。

どうやらこの日の殿下とお茶会で、私と殿下は招待客を確認するように言われていたらしい。

「あら？ このお茶会にミアアさんも来ていたんですね」

「そうだ、学園でミアと親しくなった後に言われた。私とミアの最初の出会いは実はこの茶会だったらしい。確かに可愛らしいご令嬢と話した記憶はあったんだが、それがミアだったと聞いたときはまさに運命だと思ったものだ」

頬ほほを染めてうっとりとした話を話すジャック殿下。

乙女おとめか！ あとかなり堂々と惚気おとけ始めたけど、解消予定とはいえ一応あなたの惚気聞かされているの、婚約者なんですけどね……？

それはそうと。

「ミアさん、私が婚約者として殿下の隣でお茶会に出席するのは、許せるのかしら……？」

「……」

殿下はまさかのだんまりだ。

私は時戻りの際の彼女の様子でもうわかっている。彼女は……ものすごく独占欲が強いのだ。

「殿下……きちんとミアさんへフォローしておいてくださいよ？ 仕方ないこととはいえ、きつと悲しむと思いますよ？」

「……わかってる」

「今回は仕方ないですけど、早くミアさんを婚約者としてお茶会や夜会に出席できるように頑張りますよ」

そして、私のお父様の命を救うのもどうか一緒に頑張ってくださいね！

そんな願いを込めてにつこり笑いかけると、なぜか殿下は目を丸くした。今日一日でこの人何回この顔をするんだらうか？

「君は……そんな風によく話す人だったんだな。本当に今まで私は何を見てきたんだらうな」

正直それはもう本当に別にいいんだけどな。

お茶会が終わる時間が近づくにつれ、私はものすごくそわそわしていた。

「気持ちにはわかるが少し落ち着け。君にとっては四年ぶりの奇跡の再会でも、君の父上にとっては数時間ぶりなんだからな」

「わかってますけど……どうしてもちよつと緊張しちゃって」

まあそうだろうなと苦笑する殿下。

殿下とのお茶会の後は、いつもお父様が私を帰りの馬車までエスコートしてくれていたのだ。お父様はこの国の高位文官だ。私のことが大好きで、少しでも一緒に過ごしたいからと仕事の合間に迎えに来てくれていた。

……来年、十四歳になる年に亡くなってしまったお父様。

体感としては四年ぶりに大好きなお父様に会えるのだ。緊張しないわけがない。

「君はいつも無表情で、冷たい目をしていて、近寄りたいたいと周りは皆口を揃えて言っていた」

「はい……？」

え？ いきなり何？

「誰かと笑いあっている姿もほとんど見たことがないし、リラックスしているようなところも見たことがない。我儘で傲慢で、冷たい人形のような人なのだと思っていたんだ」

ええー？ それ、ほとんど殿下のせいだと思うんですけど……？

突然始まった悪口のオンパレードに、だけど殿下の表情はなぜか穏やかで戸惑ってしまう。

よほど私が微妙な顔をしていたのか、殿下はふっと笑った。

「まさかそんなにも君がよく喋り、表情をくるくる変える感情豊かな人物だとは夢にも思わなかったんだ。君をそんな風にさせていたのはきつと私だったんだろうな。……何年も、君という人間を決めつけて、踏みにじるような真似ばかりして本当にすまなかった」

まさかの謝罪である。こうして話してみると殿下も悪い人ではないんだよね。かなり盛大に拗らせていたってところだろうか。

「……私も、はっきり嫌いだなって言ってますみません。あの時は興奮してあんな風に言いましたけど、嫌いだとは思っていませんよ」

あの瞬間は本当に大嫌いだと思っただけど、それは黙っておくことにする。

「ははは！ そうだな、嫌わずに友人として親しくしてくれれば嬉しいよ」

「——ルーシー」

はっと息を呑み振り返る。

「お父様！」

呼びかけられた声の先に、その人は立っていた。

思わず駆け寄り、飛びつくように抱き着いた。

——お父様！ 本当に、本当に生きてる！

時戻りをして、この目で見えるまで安心できなかった。

大きくて温かくて、大好きなお父様の匂い……。

ぎゅうっと首に回した腕に力を込めて縋りつくと、お父様も私を抱きとめて大きな手で頭を撫で
てくれる。本当にまた、お父様に会えるなんて！ 胸が詰まって息が苦しい。

「え!? ルーシー!? なんで泣いてるの? ……まさか、殿下が何か……?」

「!? わ、私は何もしていない!」

私が泣いて泣いて否定できないもんだから、殿下はしばらく無意味にネチネチ言われていた。

ごめんね殿下!



「ルーシー、本当に殿下に何かされたわけじゃないのかい……?」

「ええ! 本当に何でもないので。突然泣いたりしてごめんなさい」

「そんなことは気にしなくていいんだよ! お前に何かあったわけじゃないならそれでいいんだ」

ニコニコと微笑みながら私の頭を撫でてくれるお父様。今私は馬車に揺られながら、お父様の膝の上に抱きかかえられて座っていた。十三歳にもなって（おまけに心は十八歳）恥ずかしいとは思うけど、今は素直に甘えていたくて大人しく首に腕を回して抱き着いている。

小さい頃はよくこうして甘えながら話を聞いてもらってたなあ。くっついているとお父様が温かくて、本当に生きてるんだって改めて感じる。あ、ダメ、また泣いちゃいそう。

「ルーシー!? やっぱり何かあったんじゃないか……!」

「ふふ、本当になんでもないの。ただ幸せだなんて思ったらちよつと泣きたくなっただけ」

屋敷に帰りつくと、我が家の飼った猫ミミリンが私に向かって飛びついてきた。

「にゃあ〜ん!」

「わ! ミミリン! どうしたの? 随分熱烈なお出迎えね!」

「お帰りなさい、あなた、ルーシー……えっ!?」

お母様がミミリンを撫でる私を見てピタリと止まる。

「ルーシー!? 何かあったの!?」

あはは、そうなるよね……大泣きした私の顔はきつと酷いことになってると思う。

「お父様にも言ったけど、本当になんでもないの。ね、心配しないで？」

その後、夕食の席で顔を合わせた弟のマーカスにも随分驚かれてしまった。

「姉さん!? その顔どうしたの!？」

……本当に申し訳ない。

それでも気にしないでと言いつ張る私に、家族は皆それ以上追及しないでいてくれた。聞かれても答えられるわけがないものね? 正直助かった。

久しぶりの家族全員が揃った一家団欒だんらん。お父様が亡くなるまでは当たり前にあつた温かい時間だけど、これが決して当たり前なんかじゃないのだと私はもう知っている。

なんて……なんて幸せな時間なんだろう。

「お父様! このお魚すっごく美味しいわ! はい、あーん!」

「あーん!? ううっ、ルーシー、そんなことしてくれるのは随分久しぶりだね……!」

マーナが身についていくにつれて、こういう戯たわむれはしなくなったものね。でも今日は特別! 感激するお父様を見ながらマーカスが声を上げる。

「あっ! 父さんだけずるい! じゃあ姉さんには僕が!」

「あらあら、私の可愛い子供たちは今日は随分甘えん坊なのね?」

優しく微笑むお母様。お父様が亡くなった後、お母様の笑顔も随分減ってしまっていた。お母様

だけじゃない、私も、マークスも、使用人の皆だつてそう。こんなに仲の良い家族から突然一人欠けてしまったって、まるで別の家になってしまったかのようだった。

時戻りして良かった。殿下が星花を見つけて、ミリアさんどうしても一緒になりたいと望んでくれて、本当に良かった。

夕食の後、皆でお茶をしながら他愛のない会話を交わす。直接問いただされることはなかったけど、皆突然泣いた私のことをすごく心配してくれているのがわかった。ミミリンがずっとお父様の足元で丸くなつていて、そんな些細なことも四年ぶりだと感慨深い。

改めて思う。きっとお父様の死を回避して、この温かい家族の時間を守ってみせる。



——その夜、ルーシーが寝静まった後。

レイスター公爵家には重い空気が流れていた……。

テーブルを囲むのは三人。

父、クラウス・レイスター。

母、ルリナ・レイスター。

ルーシーの一歳年下の弟、マーカス・レイスター。

「みゃー！」

あと猫のミミリン。

「では、家族会議を始めます」

娘ラブのクラウス・レイスターは、妃教育の成果もありすっかり家族の前以外で感情を見せなくなっていたルーシーの王宮での突然の涙を、本人の「なんでもないから」の言葉で片づけられるような男ではなかった。

「ルーシーちゃんがあなたに縋りついて号泣ごうきゅうしたっていうのは本当のようね……」

「夕食の席でも妙にテンションが高かった。いつもの姉さんの二割増しだった。無理して元気に振る舞っていたんじゃない？ くっ……なんて健気けなげな姉さん……っ！」

「ルーシーは否定したが、どう考えても殿下のせいとしか思えない。くそっあいつめ……やっぱり一発殴なぐって帰ればよかった」

「とにかく！ 何があったのか調べましょう。今までは辛いつら妃教育もルーシーちゃんが何か言ってくるまでは見守りましょうのスタンスだったけれど、そうも言っていられないわ」

妃教育が厳しく辛いものであることは受けたことのない者でもわかることだ。王城へ通うようになってから、どんどん元気がなくなっていく娘のことを心配してはいたものの、それでもルーシーが頑張っているようだったので黙って見守っていた。妃教育に励んでいるなら水を差すものではな

いと思っていたし、ルーシーを信頼していたからこそ余計な手出しはせずにはいた。だがもしも彼女を傷つける何かがあったかもしれないのなら話は別だ。その原因が婚約者である男かもしれないのならなおさら……。

「僕は最初から殿下は姉さんを任せられるような男じゃないと思ってたんだ！」

「にやおーん！」

勘違いのような勘違いではないような内容の会議を続け、レイスター家の夜は更けていった。

今日は王宮の庭園で開かれるお茶会の日。

基本的には高位貴族か、裕福な低位貴族の子息令嬢が呼ばれている。

同年代の子供達で交流を持ちましようってことで開催されたお茶会だけど、ジャック殿下の将来の側近候補を見繕ったり、この年代の子供たちに将来有望な子がいないか、その資質を見たりする意味合いも大きい。

「ごきげんよう殿下、ルーシー様」

「ごきげんよう、アリシア様。今日は一緒に楽しみましょう」

にっこり笑って挨拶を返す。

このお茶会は王妃様主催なのだけど、私は一応ジャック殿下の婚約者として主催者側の人間扱いだ。殿下と並んで招待客の挨拶を順番に受けていく。王妃様が顔を出すのは会の後半になる予定。

一度目は私も殿下も一言も無駄な声を発さず、黙々と笑顔を貼り付け挨拶を返した。

けれど今の私達は友人。ボソボソと二人にしか聞こえない小声で、合間に気の抜けた会話を楽しんでいた。

「……ねえ、アリシア様は今日も絶好調ね。当たり前前だけ一度目と全く同じで笑っちゃうわ」

「時戻りをしてまだ他の貴族たちと関わっていないからなあ。今日を境に少しずつ変わっていくんだろうな」

アリシア様はシャラド侯爵家のご令嬢で、ジャック殿下を慕って学園でも追いかけてまわっていた姿が印象的だった。今も挨拶の一瞬で私を探るようにじーっと見ていた。ああ恐ろし。覚えてる覚えてる、この感じ！ 「肩書だけの婚約者様」って私に向かって一番多く言ったのも確かアリシア様だった気がするわ。

「わっ、懐かしい！ ユギース子爵家の長女だわ。ユギース子爵家は学園入学前に隣国に移住しちゃって、このお茶会以降会ったことがなかったのよね」

「ユギースは薬師の家だからな。移住理由は隣国の土が薬草栽培に適しているからだと言っていた。ハイサ病の薬を開発したのはユギース子爵だぞ」

「まあ、そうなの？」

葉。葉かあ。お父様の死を回避する手段の一つとして、ハイサ病の葉になる葉草を育ててみるのもいいかもしれない。葉を開発するのは一度目と同じくユギース子爵であるべきだから、ユギース家と前よりも繋がりを持つようにして……今日はこの後、長女のマリエ様と絶対お話ししよう。

「あらっ？ あれは確か……」

ちらりと殿下を窺うと、厳しい目でその人物をじっと見つめていた。

「あれはアルフレッド・バルフォア。バルフォア侯爵家の嫡男で——ミリアの婚約者だった男だ」
彼、アルフレッド・バルフォアは一人つまらなそうな顔で挨拶の列に並んでいた。

そうそう、この人がミリアさんの婚約者だった人だわ！

栗色の髪の毛に空色の瞳の優しそうな美少年。まだ十三歳だもんね。あと二年して学園に入学するころにはかなりの美青年に成長して、女子生徒からの人気も高かった気がする。

それにしても、ミリアさんが男爵令嬢なのに、婚約者だった彼は侯爵家だったのね？ 恋愛結婚ならばままある組み合わせではあるけれど、ミリアさんはのちの殿下の恋人になったわけだし……政略結婚にしては身分差が大きい気がする。

「バルフォア侯爵家はもう少し後、没落間近というところまで落ちぶれる。そこで裕福なブルーミス男爵家のミリアと婚約するんだ」

「そうだったのね……」

「ブルーミス男爵は大喜びだったそうだよ。ただ私は、バルフォア家の没落騒動はアルフレッドの

策略ではないかと少し疑っている」

「え？ 自分の家を没落寸前まで追い込んだっていうこと？」

「ああ。アルフレッドは……ミリアに異常に執着していたらしい。ミリアに話を聞いて私も驚いたものだ。あれは危険な男だ。君も気をつけろ」

なるほど。ミリアを手に入れるために家をおとし陥れたのだとしたら確かになかなかのものだわ……。うーん、可愛い子って大変だ。そういえば学園でも、殿下以外にもたくさん的高位貴族の令息がミリアさんに夢中だった。婚約者でありながらそんな人気者の彼女を射止められなかった彼もなかなか不憫ふびんではある。

アルフレッド様を見ると、目が合った。

驚いたのか、少しだけ見開いた空色の瞳がすごく綺麗きれいに見えた。

「——悪い人には、見えないけど」

私の眩くらきに、殿下は盛大に顔を顰しりぞめた。

今日のお茶会はガーデンパーティー形式で、一応の席はあるものの自由に移動したり、ビュッフェスタイルのお菓子や軽食を自分で好きなだけ取って食べたりできる。

だいたい挨拶も終わり、参加者は思い思いにお茶会を楽しんでいた。

そんな中、一通り参加者のご令嬢とお話をした後の私はというと。

「あーあ、なんだか一度目より疲れちゃったわ……」

……案の定不機嫌オーラ全開のミリアさんに耐えかねて、会場からは死角になる庭園の奥の方へ一人逃げてきていた。

だって、めちゃくちゃ怒ってるんだもん！

参加者のなかでも最後の方に挨拶に現れたミリアさんは、それはそれは鋭い目つきで私を見つめた。その目が言っていた。「近い、ずるい、ふざけるな」って！（私の勝手な解釈だけど）

もっと簡単に言うともものすごく睨んでいた。私のせいじゃないんだってば！ そんなことは言えないので笑顔の仮面で対応したけどね。

「はあ……」

無駄に気疲れしてしまった……。

一度目の、ただ無感情に殿下の隣に座ってればいつの間にか終わったお茶会がほんのちよつとだけ恋しい。

ミリアさんの表情を思い出して、思わず体が震えた。

殿下、あとでなんとかフォローしといてよね……。

「ここでもいいか」

庭園の奥にぼつんと置かれたベンチに座り、ドレスのポケットの中からハンカチの包みを取り出す。それを膝ひざの上にそのまま広げた。

ふふふ、一人でゆっくり食べようと思ってクッキーとマドレーヌをいくつか拝借してきたのだ！
「ん〜！ やっぱり美味しい！」

婚約前ではなく、十三歳に時戻りしてよかったことの一つ。

王宮お抱えのパティシエ、バルナザールさんとの絆きずながなくならなかったこと。

このクッキーもマドレーヌも、私が大好きだと言っていた味だ。最高。バルナザールさん大好き。
今度王宮に行ったときにお礼を言いにもたまたま厨房へ行こう。（そしてまたお菓子を貰おう！）

そんな風に一人ホクホクな気持ちでお菓子を頬張っていると、庭園の向こう側から不意に誰かが顔を覗のぞかせた。

「——あ、レイスター嬢……」

呆けたように私の名前を呟いたのは、さつき気をつけろと言われたばかりのアルフレッド・バルフォア侯爵令息だった。

アルフレッド様は少し迷うようなそぶりを見せたあと、ゆっくりこちらに近づいてきた。

「あの、お隣失礼してもよろしいですか？」

「あ、はい、どうぞ」

思わず返事をしてから気がつく。——私、齧かじりかけのマドレーヌを手を持ったままだわ。

一瞬どうしようかと迷って、まあいいかと思いなおす。アルフレッド様が隣に座るのを横目で見

届けながらもうひと口マドレーヌを頬張った。

「ふふっ……マドレーヌ、好きなんですか？」

アルフレッド様は肩を震わせている。

え、私、もしかして笑われているの？ さすがに恥ずかしくなって俯いた。顔も熱い。ちよっと赤くなってるかも。やだ、時戻り前はいつだって無表情だって怖がられていたこの私が？ 一步家の外に出れば何にも動じることはなかったのに！ ……動じるようなことが起こるほど、他人と交流がなかったというのは気づいてはならないことである。

彼はそんな私の様子を見て、

「ああ、ごめんなさい、あまりに美味しそうに食べていらっしやるから思わず……失礼いたしました」

そう困ったように笑い、丁寧^{ていねい}に頭を下げた。

「……いえ。あの、マドレーヌも他のお菓子も好きです。よかったら一緒に食べますか？」

「え？ いいんですか？」

「私のハンカチの中のものでよければ」

彼はもう一度おかしそうに笑って、差し出したマドレーヌに手を伸ばした。

「——まあ！　それであなたはどうしたんですか？」

「どうにか誤魔化そうとして、同じ物を作って置いておけばいいんじゃないかと厨房に入りました。それで……」

「それで？」

「もちろん大失敗。卵は五つも無駄にして、厨房は粉まみれになり大惨事。あれほど素直に怒られておけばよかったと思つたことはありません」

「ふふふ、結局余計に怒られてしまったのですね」

「その後ひと月も甘いものを食べさせてもらえませんでした」

私はアルフレッド様とすっかり打ち解け、仲良くなつていた。

殿下には確かに気をつけろつて言われたけど、こんなに人懐ひとなつっこい人のいったい何に気をつけたらいいの？

今は彼が軽い気持ちでつまみ食いしたお菓子が実は大事なお客様にお出しするはずのものだからとわかつてゾツとしたときの話を聞いていたところ。結局お菓子は人気の菓子店のものを慌あわてて買いに走つたらしい。

アルフレッド様は甘いものがお好きなんだとか。私と同じね！　おかげで話もよく合った。ハンカチに包んだクッキーとマドレーヌはとつくになくなつていたけれど、私達はそのまま二人でおしゃべりしていた。



——この人が危険な男？　こんなに無邪むじゃき気に笑う人が？

殿下よりよっぽど純粋な人に見えるけど……？　なんて、そんなことは言えやしない。まあ、ミリアさんを巡る男同士、何か相容あひいれないものもあるのかもしれない。

「名残なごり惜しいですがそろそろ戻りましょう。王妃様がいらっしやる頃だわ。楽しい時間をありがと
うございました」

彼は何か言いたそうに何度か口を開いては閉じてを繰り返し、それでも何も言わずに頷うなずいた。